

～昨日の風 明日の風～
**経営コンサルタント
 独白録**

[第68回] 道具を大切にする人たち



戸敷 進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、㈱経営改善支援センター(福岡市、URL: <http://sien.co.jp/>) 代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家。全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

建設業界に身を置いていた頃、多くの職人やオペレーター達と仕事をしました。頑(かたく)なさや取っ付きにくさもありますが、周りに認められ仕事ぶりが優れていた人たちの共通点は「道具を大事にする」ということでした。建設機械のオペレーターであれば、重機と呼ばれる建設機械の始業点検やメンテナンスに関してのプロです。グリスアップと呼ばれる日常の作業や座席周りの清掃、キャタピラについた泥落としなど、手を抜くことなく毎日きちんと果たしていました。大工や左官という職人たちに至っては、スコップやノコギリ、コテの手入れを怠らずいつも愛着を込めて取り扱っていました。

やまし
山師の言葉

建設業界にデビューした駆け出しの頃、森林組合に雇われていた「山師」と呼ばれる木を切る人たちの刃物に対する手入れの様子に驚いたことがありました。ナタ、ノコ、雑木ガマなど一日が終わった後丁寧に研ぎ直し、翌日には触れるだけで切れてしまう状態にして作業場に現れるのです。一度だけ世話役の人のナタを借りて木を切り倒した時の鮮やかな切断の感触は今でも忘れられません。「どんな世界でも、道具を大事にしない人間は一人前にはなれない」と、その世話役さんは言っていました。

モノがあふれている時代なので、今更道具の大切さを話したところで理解しづらい世代があるかもしれません。「そんな細かい話はどうでもいいんじゃないですか。買ってあげればいいだけの話です」とあっさりと言われたこともあります。しかし、多くの企業を訪問して、事務所が汚かったり工場が埃だらけの所では、道具を大切にしている気配はあまり感じられません。錆びた工具が無造作に放り投げられていたり、会社の名前の入っている車が泥だらけで車内に清潔さの欠片(かけら)もありません。「うちの会社の車はリースですから!」と言われたこともあります。

そして、そういう会社に限ってコミュニケー

ションが悪く、暗く、生産性も低い。「そんなことは聞いていない」「知らなかった」「私の仕事ではない」「そんな細かなことまで手が回らない……」などと、不満の巢窟のような状態です。

製造系の会社でありながら、製造機械が埃だらけでも平気。フロアにゴミが落ちていても平気。書類が山積みでも平気。その延長線として、自分たちの作っている製品に対する愛情も愛着もなく、当然顧客にも興味がなくクレームの嵐……。工場内に置かれたパソコンが埃だらけでも、誰もカバーをかけようという気持ちもない。

神は細部に宿る

「神は細部に宿る」と言ったのはアビ・ヴァールブルクというドイツの美術史家です。物事を大きく見て、小さなことをおろそかにしては意味がない。その細部にこそ人生の真実や宇宙の真理が示されているからだ、という意味です。

スポーツ新聞社の副編集長を務めた大学時代の友人から聞いた話ですが、一流のプロ野球選手ほど道具を大事にするそうです。そうした選手を見習い、道具を大事にする選手達がたくさんいるチームはやはり強いのだそうです。スポーツだけではなく、芸術、技術、教育、そして経営もまた細部を疎かにしてなし得るものではありません。

会社の道具、大切にしていますか?自分の持ち物と同じように大切にしていますか?会社や工場は清潔ですか?自宅と同じように丁寧に清掃していますか?組織が一瞬にして劇的に変化することはありません。小さなことを、当たり前のように淡々と処理することができるようになって初めて会社の変化が始まり、それが風土の変化につながっていきます。そして、良い風土の会社に良い人が集まり、良い情報が集まり、良い仕事が集まります。

新年度と新年号を迎えるに当たり、今一度組織運営の「原理原則」を考えて見る必要があります。